

グリムとアルニムのメルヒェン論争

野 口 芳 子

1

一般にメルヒェン (Märchen) という言葉は、今日でも様々なふうに理解され、使用される傾向にある。ヴァーリッヒの辞典でも Märchen の項を引くと「空間や時間の束縛を越えた空想的な物語で、そこでは自然の法則に縛られず、不思議なことが始終起こる。」と説明してから、日常的な使い方として「作り話はよしてくれ (Erzähl mir doch keine Märchen)」とか、「それは夢のような話だ (Es ist wie ein Märchen)」などの例を挙げて、メルヒェンという言葉が「本当でない作り話」とか「素晴らしく、驚異に満ちたもの」として使われていることを指摘している。¹⁾ 語源的には今日では廃れてしまった名詞メーレ (Märe: 知らせ, 噂, 小咄) の縮小形として 15 世紀頃から使われていたそうだが,²⁾ 特定の文学形態の名称として用いられたのは、グリム兄弟が彼等の収集したメルヒェンを『子供と家庭のメルヒェン集』として出版して以来である、と A. ヨレスは述べている。³⁾ グリム兄弟にとってメルヒェンとは単に夢のような空想的な作り話ではなく、民族 (Volk) の中から「自らひとりでに発生し」⁴⁾ 語り伝えられてきた民族全体の文学 (Poesie) であり、人間の歴史の証人とでも言えるものであった。彼等はメルヒェンとは本来、民族メルヒェン (Volksmärchen) のことを指すのであって、個人の想像力によって自由に作り上げられた創作メルヒェン (Kunstmärchen) とは全く異なったものであると規定している。しかも単に異なっているだけでなく、民族メルヒェンの方が遙かに高い価値を持ったものであり、それは「自らひとりでに発生した」民族全体の文学であり、欠けたところの全くない「完全文学」であるとまで言っている。⁵⁾ 一方 A. v. アルニムは民族メルヒェンを殊更高く評価するグリム兄弟のメルヒェン観とは真っ向から対立するメルヒェン観を持っていた。彼にとってはメルヒェンとはあくまで文芸作品としてのメルヒェンであり、それが民族メルヒェンか創作メルヒェンかと言った

1) Wahrig, Gerhard: Deutsches Wörterbuch. Gütersloh (Bertelsmann) 1968, S. 2361.

2) Dudenredaktion (Hrsg.): Der große Duden. Bd. 7. Mannheim (Duden) 1963, S. 422.

3) Jolles, André: Einfache Formen. 5. Aufl. Tübingen (Niemeyer) 1974, S. 218.

4) Grimm, Wilhelm: Kleinere Schriften. Bd. I. Berlin (Dümmler) 1881, S. 112.

5) Steig, Reinhold: Achim von Arnim und Jacob und Wilhelm Grimm. 2. Aufl. Bern (Lang) 1970, S. 89.

区別など不必要であると考えていた。今日、日常的に使用されているメルヒェンという語が、その両者を区別せず、単に夢のような不思議な話という意味で用いられているのと似通ったところがある。しかし、今日の一般の人々は、メルヒェンについて詳しい概念規定を知らずにそのような使い方をしているが、アルニムの方は、グリム兄弟との論争を経て確立した独自のメルヒェン観に基づいた上でのことなのである。両者のこのメルヒェン論争を探ることは、従って混乱している今日のメルヒェンについての概念規定の原因を確認することにもつながると思われる。

2

グリム兄弟の民族メルヒェンに対する高い評価は、歴史的にみても、J. G. ヘルダーの民族文化全体に対する再評価の流れを受けたものと言える。ヘルダーは、民族文化を上流文化に相対するものとして捉え、迷妄を退け、理性を第一とする啓蒙主義者が、「哀れむべき迷信」とか「愚かな乳母のおしゃべり」として顧みなかったメルヒェン、伝説、民謡、神話 (Mythologie) などの価値を強調した。⁶⁾ 民謡 (Volkslied) という言葉は彼の造語であり、それぞれの民族の口から歌われる歌と規定し、民謡やメルヒェンなどの民族文学の収集を呼びかけたのだ。古い国民的作品の中に「諸民族の自然の物語」⁷⁾ が秘められているのを見、民族の考え方や感覚をそこから読み取ろうとしたのだ。メルヒェンなどの民族文学を「真に有効な自然の言葉」⁸⁾ と見做し、その自然文学 (Naturpoesie) の中にこそ、民族の根源的で自然な詩心 (Poesie) が秘められていると考えているのだ。⁹⁾ このようなヘルダーの自然観は、J. J. ルソーの影響を強く受けたもので、自然を発展した社会、文明、理性に対するもの、即ち根源的なもの、真実なもの、無垢なものとして捉えている。¹⁰⁾ そして、啓蒙主義の時代に理性によって押さえつけられていた人間の自然な感情の解放を主張したのだ。ヘルダーとルソーが共に自然を特に感情という面に重きを置いて捉えていたのも、理性崇拜に対する反感からと考えるとうなずけよう。とはいうもののヘルダーは、自然というものを余りにも感情の尺度に即して解釈し過ぎたようだ。H. モーザーが指摘するように、彼にとっては本当の気持ちや深い情熱や想像力から生まれてきたあらゆる種類の文学が、自然文学、即ち民族文学であり、従って一般に創作文学と呼ばれるものも、それが真正の感情や情熱、想像力から生まれ

6) Herder, Johann Gottfried: Alte Volkslieder, Zweiter Teil. In: Sämtliche Werke. XXV. Hrsg. v. Bernhard Suppan. Hildesheim (Olms) 1968, S. 83.

7) Ebd. S. 83.

8) Herder, J. G.: Über die Wirkung der Dichtkunst auf die Sitten der Völker in alten und neuen Zeiten. In: Sämtliche Werke. VIII. S. 342.

9) Herder, J. G.: Auszug aus einem Briefwechsel über Ossian und die Lieder alter Völker. In: Sämtliche Werke. V. S. 183.

10) Moser, Hugo: Volk, Volksgeist, Volkskultur. In: Zeitschrift für Volkskunde. 53. Jg. (1956 / 57), S. 132.

たものであれば、その中に含まれてしまうわけである。¹¹⁾ シェイクスピアやゲーテなどの作品がしばしば民族文学として取り扱われているのも、そういう見方に依るものといえよう。更に、彼のフォルク (Volk) についての概念規定が非常に曖昧であったのも、民族文学に対する彼の解釈が多義的なものとなった要因の一つであろう。ある時は一国の住民全体を指したり、ある時は社会の下層の人々、即ち庶民を指したり、又、ある時は人種としての民族全体を指したりというふうに、大きく分けて三通りの異なった意味合いで使用しているのだ。¹²⁾

民族文学についてのヘルダーのこの包括的な捉え方が、その後のロマン派の人々の間で二つの大きな方向へと発展していくことになる。一つは A. W. シュレーゲル、J. L. ティーク、C. プレンターノ、A. v. アルニム等を中心とする民族文学の審美的文学的把握であり、もう一つは J. ゲレスやグリム兄弟等を中心とする民族的神話的把握である。¹³⁾ 前者に属するアルニムやプレンスターノは、伝承されてきた民族メルヒェンを審美的観点からのみ捉え、個人の芸術的創作メルヒェンと同じ基準でその価値を判断している。伝承を個々の文芸作品の題材として使用し、自分たちの時代の文学の中で再生させることにその意義を見だしている。後者に属するゲレスやグリム兄弟は、民族メルヒェンを神話時代の思い出を含んだ神聖な報告とみなし、植物のように自然が作り出した作品、即ち自然文学であると捉えている。審美的文学把握と民族的神話的把握を主張するこのような対立は、民族メルヒェンの概念規定をめぐっての激しい論争へと発展し、特にグリム兄弟(主にヤコブ・グリム)とその友人アルニムとの間で巻き起こされた論争は有名である。グリム兄弟とアルニムはドイツ文学史上、どちらも後期ロマン派のハイデルベルク詩派に属する人物として捉えられている。しかもグリムのメルヒェン集はアルニムの尽力によって出版に漕ぎつけたという経緯まであるほどだ。その両者が民族メルヒェンというものについて著しく異なった捉え方をしているのだ。彼らは私生活においては親しくつき合いながら、この問題に関しては激しく反論し合い、華々しい論争を展開するのである。そのことは 1808 年から 1813 年にかけて両者の間で交わされた手紙の中に明瞭に現れている。

3

1809 年 7 月 24 日、当時 27 歳の青年だったアルニムは、23 歳のヤコブ・グリム宛に手紙を出した。『隠者新聞』第 19 号に掲載された論文の中でヤコブが「二つのもの(創作文学と自然文学)はこの様に、内面的にも異なった現れ方をしており、時間的にも必然的にかげ離れたものであるので、同時であるということとはあり得ないのである。」と述

11) Moser, H.: Studien zur deutschen Dichtung des Mittelalters und der Romantik. Berlin (Schmidt) 1984, S. 265.

12) Moser, H.: Volk, Volksgeist, Volkskultur a.a.O., S. 127 f.

13) Moser, H.: Studien zur deutschen Dichtung des Mittelalters und der Romantik. a.a.O., S. 266.

べて、¹⁴⁾ それぞれの文学の成立時期の相違に注目しているのに対して、次のような反論を書き送ったのだ。「我々はそのことについての歴史的な証明を要求する。というのは我々の意見では最古の文学の中にも最新の文学の中にも、この二つの傾向が現れていると思うからである。」¹⁵⁾ 『隠者新聞』の編集者であったアルニムは、伝説やメルヒェンのような伝承されてきた民族文学と、創作メルヒェンのような個人の想像力から生み出された創作文学との間に、ヤーコブの言うような歴史的な成立の相違を認めることができなかった。

一方グリム兄弟にとっては、創作文学とは近代のある特定の人間によって生み出されたものであるが、民族文学は古代の人々の中で自然に生まれたものが人々によって守られ、伝えられてきた民族全体の文学なのである。そして現代の個人の作品は、古代の全体の作品より価値が低いものであると考えている。「現代の芸術は決して絶対的に完全なものではあり得ないということを、私は信じているからです。…国民文学 (Nationaldichtung) だけが完全なのです。何故ならそれはシナイの掟と同じように神自身によって書かれたものだからです。それは一片たりとも人間の作品のようなものを含んでいないのです。」と1810年12月5日、ヴィルヘルム・グリムはプレントナーノ宛の手紙に書いている。¹⁶⁾ 彼等は民族と結び付いた文学 (Poesie) の叙事詩的時代の存在を確信しており、自然文学はこの時代に神自身によって書かれたものであると主張している。創作文学との相違点は、自然文学が人間の作品ではなく、神の作品であるという点だというのだ。何故ならそれは「最初の創造主」、「超人間的人間」、即ち「神」によって作られたものだからである。それ故、民族メルヒェンは何世紀もの間大切に保存されてきたが、「一方、その後には作られたあらゆる個人の作品は、短期間の間しか引き止めておくことはできない。」というのだ。¹⁷⁾

しかしアルニムはこの厳格な区別を認めようとしめない。彼はヤーコブ宛の手紙 (1811年4月5日) で、「芸術的意図を持たずに一行だって歌った者は誰もいなかったということを、僕は民謡の歌い手であるホメリデンの名において君に誓うよ。」と言っている。¹⁸⁾ アルニムにとっては民族文学も、元来は民族全体からではなく、誰か個人の作家によって作られたものであり、創作者である作家と受容者である庶民 (Volk) の関係は、時代によって左右されるものではなく、常に同じものであったのだ。¹⁹⁾

このアルニムの考え方に対してヤーコブは更に手紙 (1811年5月20日) で、自然文学と創作文学の相違は歴史的に捉えて初めて理解できるものである、と異議を唱えてい

14) Grimm, Jacob: Kleinere Schriften. Bd. I. Hildesheim (Olms) 1965, S. 399.

15) Steig: a.a.O., S. 14.

16) Ebd. S. 89.

17) Ebd. S. 139.

18) Ebd. S. 110.

19) Gass, Karl-Eugen: Die Idee der Volksdichtung und die Geschichtsphilosophie der Romantik. Wien (Schvoll) 1940, S. 19.

る。「昔の人々は我々より、もっと偉大で、もっと純粹で、もっと神聖であった。…だから昔の叙事文学は私にとっては…より純粹で、よりすぐれたものである。」²⁰⁾ ヤーコブにとって歴史の流れというのは、進歩、上昇を意味しているのではなく、神のいたあの根源的な高みからの落下、退化を意味していた。彼は最古の時代を「金の時代」、『ニーバルンゲンの歌』の現れた中世を「銀の時代」、そして現代を「鉄の時代」と見做している。²¹⁾ それ自体が素晴らしく、純粹で壊れることのない金は、外からいろいろと手を加えなければならぬ鉄よりもずっと完全である、というのだ。²²⁾

古い文学に対するヤーコブのこの歴史哲学的解釈は、アルニムの純粹文学の理解にはおよそ馴染まないものであった。彼は自然文学と創作文学とは全く異なった別の概念として規定することに承服できず、「文学とは古くもなければ新しくもなく、そもそも歴史というものを全く持たないものである。」(1812年10月22日)と反論している。²³⁾ 最古の神話の時代と不完全な現代との間に、彼は根源的な意味での隔たりを認めることなどできなかったのだ。人を創作へと駆りたてる自然の衝動があるからこそ、芸術作品は生み出されるのであり、自然と創作は共に芸術作品を完成するのに必要な要素である、というのだ。要するに彼は、自然は自然の衝動、創作は創作意識を意味するものとして理解しており、自然と創作とを共に審美的カテゴリーとして捉えているのである。

これに対してヤーコブは1812年10月29日、アルニムへの手紙で再び「金の時代の文学は我々が生きている鉄の時代の文学よりも、より高く、より歓喜に満ちているものである、ということに私は気付いている。」と書いている。²⁴⁾ 最古の時代には、人は自然と神の調和の中で生きていた。しかしこの調和はその後に壊されてしまった。現代の間はそれ故、自然と神から疎外されてしまっている、というのだ。人間の歴史において、その古い時代と新しい時代との間に、大きな質的な相違があると考えこの歴史観は、ヤーコブの文学の概念規定と直接に結び付いている。彼にとって自然文学というのは、最古の調和に満ちた金の時代に民族全体から溢れ出た古い文学のことであり、一方創作文学とは、疎外された鉄の時代である現代に、新しい人間によって個人的に作られた新しい文学のことであるのだ。

ヤーコブのこのような歴史観は、現在の我々には、確かにそのまま素朴に適用し得ない多くの問題点を含んだ見方のように思われる。しかしここで考慮しなければならないのは彼の言う現代とは、ドイツがナポレオンの率いるフランス軍の支配に苦しみ、諸侯の分割統治の中で、政治的にも文化的にも打ちひしがれていた頃のことを指しているということである。敗者であったドイツは、勝者であったフランスから流れ込んで来たり、押し付けられたりした市民的改革や、産業革命以降の資本主義体制を、歴史的必然

20) Steig: a.a.O., S. 117.

21) Ebd. S. 119.

22) Ebd. S. 119.

23) Ebd. S. 225.

24) Ebd. S. 238.

として捉えることができず、逆にそれに激しく反発して、自らの理想をドイツ民族が結束していたかつての神聖ローマ帝国に見ようとしていた。²⁵⁾ そんな中で当時ロマン派の人々が中心になって、民族文学によって愛国心を高め、連帯感を強めようという動向が活発になり、文学におけるフランスへの追従を避け、ドイツ民族全体の独自の文学を追求し、自らの再生と統一を目指していたのである。グリム兄弟の調和に満ちた輝かしい最古の時代とは、キリスト教の言う神の楽園が地上において実現していた時代のことを指しているようであるが、しかし、それは宗教的なものに留まらず、歴史的、政治的に実在していた昔の栄光に満ちた民族全体の統一国家をも指していたのであろう。技巧を重ねる擬古典主義的なフランス文学ではなく、もっと根源的な人間の自然の声、即ち「自然文学」に耳を傾け、民族発生の頃から存在していたと考えられる「民族文学」に注目し、当時の政治的束縛を越えたこのドイツ民族全体の文学を「国民文学」と捕らえていたのであろう。従ってグリムの言う国民 (Nation) とは狭義のものでなく、民族全体を指す包括的なものであるのだ。口伝えに伝えられてきた民族メルヒェンをヤーコプがこよなく愛したのは、彼がその中に、何世紀もの間ずっと大切に保存されてきた民族全体の自然文学を見たからなのである。

4

ところで、グリム兄弟の民族メルヒェンに関するこの理論は、メルヒェン集編集という実践の中ではどのように生かされているのであろうか。1812年に『子供と家庭のメルヒェン集』の第一巻が出、1815年に第二巻が出たが、その前書きでグリム兄弟は、伝承されたメルヒェンをできるだけ忠実に再現するよう努力した、と断言している。²⁶⁾ しかしながらアルニムは、グリム兄弟の忠実な仕事のやり方について疑問をもっている。「僕は『子供と家庭のメルヒェン集』が、受け取ったものをそのまま書き取ったものだとはいくらか君達がそれを確信しようとも決して信じないよ。人間の内部には創作し続けていこうとする創造への衝動が、いかなる意思にも打ち勝つほど強くて、それを完全に押し殺しておくことはできないものだよ。」と1812年12月24日付けの手紙で言っている。²⁷⁾ グリム兄弟がそのメルヒェン集で行ったのは、収集したものをそのまま再現した学問的な仕事ではなく、それを詩的にまとめた「作家の仕事」である、と言いたかったのであろう。²⁸⁾

それに対してヤーコプは同年12月31日付けの手紙で、彼の考える「忠実な仕事のやり方」について次のように説明している。「忠実」には二種類あって、一つは「数学的

25) Kollektiv für Literaturgeschichte im Verlag Volk und Wissen (Hrsg.): Romantik. Erläuterung zur deutschen Literatur. Berlin (Volk und Wissen) 1977, S. 231-235.

26) Kinder- und Hausmärchen ges. durch die Brüder Grimm. München (Winkler) 1973, S. 34.

27) Steig: a.a.O., S. 248.

28) Vgl. Jolles: a.a.O., S. 225.

な忠実さ」で、それは全てを正確に再現することを意味するが、実際の話の中では存在し得ない種類のものである。もう一つは「適切な忠実さ」(rechte Treue)であり、それは話の眼目を正しく伝えることを意味するものである。²⁹⁾メルヒェン編集における忠実さとは、従ってヤーコブにとっては、数学的正確さではなく「適切な忠実さ」を意味するのである。適切な忠実さとは、ギンシェルが言うように、語り伝えられてきたメルヒェンを書き取る際に、外面的な改作や変更は認めるが、筋の運びや文学の眼目に対する内面的な変更や改作は許さないということなのであろうか。³⁰⁾ヤーコブのいうこの「適切な忠実さ」という表現は、それ自体非常に曖昧で規定しにくいものである。実際、表面的変更には留まらないこと、即ち、異形(Variante)を結び付けることによって話を再構成するという内面的変更まで、グリムのメルヒェン集ではなされている。

この矛盾は、メルヒェンの忠実な再現を目指したヤーコブと文体的脚色を施したヴィルヘルムとの意見の対立から生じたものと従来は説明されていた。しかしヤーコブが書き取ったメルヒェンも又、弟のと同様に異形の結合や変更がなされていたということが明かにされたので、³¹⁾両者の意見の相違が矛盾をもたらしたとの見方は、適切であるとは言いがたい。それではこの矛盾は一体何処から生じたものなのか。その原因を究明するには、彼等がメルヒェンを収集し始めたそもその経緯から考察してみる必要がある。グリム兄弟はメルヒェン集を出版するために、最初から自ら計画して学問的にメルヒェンを集めたのではなく、最初はプレントナーの出版計画の手伝いとしてメルヒェンを集めていたのである。³²⁾プレントナーから推薦された見本に適合したものを資料として集めようと努力した結果、彼等の集めたメルヒェンは当然、プレントナーのメルヒェンについての概念によって、テキストの選択や語り手の層が最初から限定されていたのだ。プレントナーが出版しないので、彼等自らそれをメルヒェン集として出版したが、そこには当然、当時の口伝えの民族メルヒェンとは異なった、アルニム同様、メルヒェンを審美的文学的に把握するプレントナー好みのロマン派的文学的傾向が秘められていたのである。庶民(Volk)を教育のない人々として、教育のある人々と明確に区別し、その無教育で素朴な庶民の文学であるべきメルヒェンを、都市ブルジョワ家庭出身の立派な教育のある人々から、彼等は数多く集めていた。プレントナーの薦めに応じた結果であろう。それ故、プレントナーと交友のあった、若くて教養溢れる都市富裕階層の令嬢が、彼等のメルヒェンの主たる語り手だったのだ。³³⁾教育によって抑圧されていた人間

29) Steig: a.a.O., S. 255.

30) Ginschel, Gunhild: Der Märchenstil Jacob Grimms. In: Deutsches Jahrbuch für Volkskunde 9 (1963). S. 166.

31) Ebd. S. 167.

32) Rölleke, Heinz: Nachwort zu Kinder- und Hausmärchen. Bd. 3. Stuttgart (Reclam) 1980, S. 596.

33) Vgl. Rölleke, Heinz: Die ‚stockhessischen‘ Märchen der ‚alten Marie‘. In: Germanisch-Romanische Monatsschrift. Neue Folge. Bd. XXV, Heft 1 (1975), S. 82ff. 拙稿『Märchen 研究の新しい方向について』[関西学院大学文学部『独逸文学研究』第18輯] 1977, 6-12頁

の自然な感情を尊重し、無教育な人々の素朴な心情が溢れ出た文学を民族文学として再評価し、メルヒェン集出版に乗り出したグリム兄弟にとって、この語り手の問題は大きな矛盾として浮かび上がってくる。

このように、ブレンターノの仕事への協力という形で始められたメルヒェン収集の動機の複雑さが、矛盾をもたらした主な原因であると考えられる。その上更にもう一つ、彼等の Volk の概念規定が曖昧であったことにもその一因があると思われる。一旦は Volk を庶民、教養のない人々と規定しながらも、同時に Volkspoesie (民族文学) は、庶民だけでなく民族全体の文学、国民文学であると説く彼等は、ヘルダーを初めとしてロマン派の大多数の人々がそうであった様に、Volk をあらゆる階層や階級を包括した総体として理解していたようでもある。この曖昧さと前述の収集の動機の複雑さとが、結局、グリム兄弟の民族メルヒェンの理論とメルヒェン集出版という実践の間に、あのような矛盾をもたらしたものと思われる。

更にその上、典型的なドイツ民族の所産と紹介されてきた彼等のメルヒェンが、実はその語り手の大多数が教育のある都市富裕市民であったというだけでなく、フランスのユグノー派の移民の家系の者であったという事実が、最近の研究で確認されている³⁴⁾。アンチ・フランスの気風に押され、ドイツ民族の団結を願って民族全体の文学としてメルヒェンを提示しようとしたグリム兄弟は、皮肉にも、フランス人の移民の子孫が語った多くのメルヒェンを、ドイツのメルヒェンとして紹介したことになる。民族が複雑に入り乱れているヨーロッパで、そもそも W・ショーフが主張したように、グリムのメルヒェンは生粋のヘッセンのメルヒェン、ドイツのメルヒェンだ、³⁵⁾と断定する方が無理な話なのである。それを敢えて民族メルヒェンと強調したところに、ナポレオン軍全盛の時代を背景に、アンチ・フランス、ドイツ民族の団結を掲げた、ロマン派の人々としてのグリム兄弟の一面が浮かび上がってくる。しかし逆に、ドイツ民族の枠を越えたこの汎ヨーロッパ的民族性があったからこそ、理論との様々な矛盾があったからこそ、グリムのメルヒェンは、当時のドイツの市民家庭のみに留まらず、世界中に広まっていったのである。更にそれは読むメルヒェンとして、独特の文体を編み出し、後のメルヒェン全体に大きな影響を与えるようになる。民族的神話的価値のみならずグリムのメルヒェンはその文学的審美的価値をも評価され、論争相手のアルニムにも気に入られるのである。グリムとアルニムのメルヒェン論争は結局、理論的解決を見ないまま、メルヒェン集が出版された翌年、立ち消えとなった。その答えはグリム自身が『子供と家庭のメルヒェン集』出版という実践の中で示したといえる。彼等の規定した、調和に満ちた最古の時代に民族全体から生まれ出た、一段と価値が高い民族メルヒェンであるかどうか

34) Weber-Kellermann, Ingeborg: Interethnische Gedanken beim Lesen der Grimmschen Märchen. In: Acta Ethnographica Academiae Scientiarum Hungaricae. Tomus 19. Budapest 1970, S. 432.

35) Schoof, Wilhelm: Zur Entstehungsgeschichte der Grimmschen Märchen. Hamburg (Hauswedell) 1959, S. 22.

は別として、グリムのメルヒェンは又、個人の自由な想像力によって作り上げられた創作メルヒェンでないことも確かである。グリム兄弟は、個人対グループという文学の担い手の相違に注目して、口伝の民族メルヒェンが持つ文体を研究し、それに文学的脚色を施し、彼等の考える「理想的」な民族メルヒェンの模型を作り上げたといえよう。しかし、そこには当然、彼等の属していたロマン派の時代の嗜好や道徳観も盛り込まれてしまっている。口承文芸としての民族メルヒェンが、グリムによって本として目で読むメルヒェンに作り上げられ、そしてこのグリムのメルヒェンがその後、M. リューティナーなどの研究者によって、民族メルヒェンの典型として取り上げられ、分析されていくのである。しかしながら、理論との様々な矛盾を背負ったこのグリムのメルヒェンは、文学的には大成功を取めたものの、その学問的研究資料としての価値に関しては、同じグリムの『ドイツ伝説集』に較べて、当然、低いものであるといわざるを得ないであろう。

Eine Märchen-Debatte zwischen Grimm und Arnim

YOSHIKO NOGUCHI

Der Begriff des „Märchens“ läßt sich bis heute im allgemeinen immer noch nicht klar definieren. Was ein Märchen ist, wird deshalb von den meisten Leuten verschieden ausgelegt. Das Märchen bekam seinen Namen als Bezeichnung für eine bestimmte literarische Form eigentlich erst, nachdem die Brüder Grimm ihre Sammlung „Kinder- und Hausmärchen“ nannten. Dabei betrachteten sie nur das Volksmärchen als Märchen, das sie sehr deutlich vom Kunstmärchen unterschieden.

Die Hochschätzung der Volksmärchen bei den Brüdern Grimm geht eigentlich auf Herder zurück, der die Volkskultur ebenbürtig neben die Hochkultur stellte und das natürliche Gefühl des Menschen stark aufwertete, das, wie Herder sagt, in der Zeit der Aufklärung durch die Vernunft unterdrückt worden sei. Er hatte jedoch ein zu gefühlsbetontes Verhältnis zur Natur, so daß für ihn jede Art von Dichtung, die aus echtem Gefühl und tiefer Leidenschaft hervorging, Volkspoesie war. Also auch ein Werk, das man der Kunstpoesie zurechnete. Dieser umfassende Herdersche Begriff der Volkspoesie hat sich dann bei den Romantikern in zwei verschiedene Richtungen entwickelt: in die mehr ästhetisch-literarisch

orientierte Richtung von Brentano, Arnim u.a. und in die mythisch volksgebundene, die vor allem von Görres und den Brüdern Grimm vertreten wurde. Diese grundsätzlich unterschiedliche Auffassung des Märchens der beiden Richtungen führte zu einer Auseinandersetzung über den Begriff Volksmärchen zwischen Arnim und den Brüdern Grimm.

Für die Brüder Grimm ist das Volksmärchen die alte Poesie, die in der „uralten harmonischen goldenen Zeit“ aus dem Volksganzen entstanden sei, während sie das Kunstmärchen als neue Poesie bezeichnen, das in der entfremdeten Gegenwart der „eisernen Zeit“ von „neuen Menschen“ durch eigene Phantasie individuell geschaffen worden sei. Der Verlauf der Geschichte ist für die Brüder Grimm ein Abfallen von jener ursprünglichen Höhe. Dabei muß man berücksichtigen, daß die Zeit, in der die Brüder Grimm lebten, eine Zeit war, in der das deutsche Volk unter der französischen Besatzungsmacht zu leiden hatte. Die jungen Romantiker versuchten damals, in Erinnerung an die nationale Vergangenheit mit Hilfe der Volkspoesie ein gesamtdeutsches Nationalgefühl zu wecken, anstatt wie bisher die französische Kultur nachzuahmen. Auf der einen Seite scheint die harmonische goldene Zeit für die Brüder Grimm die christliche Urzeit zu bedeuten, in der das Paradies auf Erden noch nicht verloren war, auf der anderen Seite aber scheint sie auf die nicht religiöse, d.h. auf die politische Gegenwart zu deuten, in der ein einheitlicher Staat für das ganze Volk existierte. Die Vorliebe der Brüder Grimm für das mündlich überlieferte Volksmärchen ist so zu verstehen; sehen sie doch im Volksmärchen Jahrhunderte lang erhalten gebliebene Naturpoesie der Urzeit. Diese geschichtsphilosophische Interpretation der alten Poesie ist Arnim durchaus fremd. Für ihn ist die Poesie weder jung noch alt und hat überhaupt keine Geschichte. Er betrachtet das Volksmärchen, wie das Kunstmärchen als Schöpfung von konkret faßbaren Individuen, also beide als Kunstwerk.

Die Theorie der Brüder Grimm wird jedoch bei der Redaktion ihres Märchenbuches nicht richtig umgesetzt. Obwohl sie immer wieder das quellengetreue Forschungsprinzip betonten, haben sie doch ihre Märchen durch Kombinierung von mehreren Varianten stark umgestaltet. Um diesen Widerspruch zwischen Theorie und Praxis zu erklären, sollte man von der Motivation der Herausgeber ausgehen. Die Brüder Grimm haben ihre Märchen nicht von Anfang an wissenschaftlich und planmäßig gesammelt, um sie dann später als ihr eigenes Buch zu veröffentlichen, sondern sie haben die Sammlung zunächst als Vorarbeit für Publikationspläne Brentanos angesehen. Weil Brentano sie nicht veröffentlicht hatte, publizierten die Brüder Grimm die Märchen. So enthalten diese Märchen selber etwas vom romantischen Geschmack Brentanos, der das Märchen ästhetisch-literarisch versteht. Obwohl die Brüder Grimm nicht versucht haben, die Sammlung als Rohstoff zu einem eigenen Kunstwerk zu gestalten, hat

ihre Märchenbuch als typisches Buchmärchen der Bürgerfamilie einen hohen literarischen Wert, das auch von seinem Disputanten, Arnim, akzeptiert und geliebt wurde. Der große literarische Erfolg der Grimmschen Märchen, so kann man sagen, ist also durch die Bearbeitung der mündlich überlieferten Volksmärchen bedingt.